



終わりがなき 頂上への挑戦

酸素が平地の三分の一しかない死の地帯といわれる八千峰に、酸素ポンベを持たず挑み続ける男がいる。登山家・栗城史多氏、二十九歳。「八千峰の頂上にある感動を多くの人と共有したい」との思いから、登山の模様をインターネットで生中継し、世界中の人々に勇気と感動を与えている。極限の世界に挑み続ける中で見えてきた境地と飽くなき挑戦心の源泉についてお話をいただいた。



くりき・のぶかず——昭和57年北海道生まれ。大学の山岳部へ入門した2年後の平成16年に北米最高峰マッキンリー(6194m)の単独登頂に成功。19年世界第6位の高峰チョ・オユー(8201m)を単独・無酸素登頂、動画配信による「冒険の共有」を行う。20年世界第8位の高峰マナスル(8163m)を単独・無酸素登頂。21年世界第7位の高峰ダウラギリ(8167m)を単独・無酸素登頂、インターネット生中継に成功。現在、世界最高峰エベレスト(8848m)の単独・無酸素登頂を目指す。著書に「NO LIMIT」(サンクチュアリ出版)「一步を越える勇気」(サンマーク出版)がある。

三度目のエベレスト 挑戦を終えて

栗城さんは二十九歳の若さで、既に八千峰を三座、単独・無酸素登頂されていると聞いています。栗城 世界には標高八千峰を超える山が十四座あります。これまで私は、二〇〇七年にチョ・オユー(八千二百一七)、二〇〇八年にマナ

スル(八千六百六十三)、二〇〇九年にダウラギリ(八千六百七十七)を、それぞれ単独・無酸素登頂してきました。二〇〇九年から毎年、エベレストの単独・無酸素登頂を目指していますが、まだ登頂には至っていません。

——三度目の挑戦となった今回は、不運にも見舞われたそうですね。
栗城 七千八百峰地点で、雪に埋めておいた食料、テント、ガスが高所に生息するキバシカラスに奪われてしまいました。ガスがないと雪を溶かして水分を補給できず、また、秋季は時間が経つほどに気温や気圧が下がり、危険であることから、最後は時間切れとなって下山せざるを得ませんでした。
——ああ、時間との戦いでもあるわけですね。

栗城 通常、エベレストは春がシーズンなんです。秋から冬にかけては気象条件がもの凄く厳しいので、ほとんど登山隊がないのですが、私は毎年、その時期にエベレストに挑んでいます。
——あえて厳しい時期に行くの。
栗城 はい。誰かが踏んだルートを迎えるような人生はあまり好きじゃないんです。冒険というのは、

誰もやったことがなくて、誰もが難しいと思っている、そういう既成概念を超えるようなことを成し遂げるものだと思っていますから。ただ、登山で大事なことは執着しないことです。昔の人はよく登山で「征服」という言葉を使っていましたが、私は最後は「対話」だと思っています。これまでずっと一人で登ってきたこともあって、私は登りながら山に語りかけるんです。「きょうは大丈夫ですか」とか、「いまは下りろと言われているのかな」という感じで。

どんなに自分が頑張っても、調子の悪い時もある。そういう周期も含めて、山に語りかけていった時に、山が登らせてくれる瞬間があるんです。だから、山は登るのでなく、登らせてもらうのだと思っています。

限界は自分がつくった 幻想にすぎない

——そもそも登山を始められたきっかけはなんだったのですか。
栗城 ひと言で言えば、失恋です。私は高校卒業後、劇作家になることを夢見て、北海道の今金町から

上京してきました。しかし、すぐに挫折し、しばらくニートの生活を送っていたんです。夢も目標も失った私に残された唯一の希望は、当時付き合っていた彼女だけ。私は彼女と一緒にならうと決心して地元に戻ったんですが、その彼女にも振られてしまいました。

それからは朝から晩まで、部屋に引きこもるようになりました。一日のうちトイレの時以外は寝ているだけ。そんな生活を一週間以上続けていたんです。そうしたらある時、布団に人の形の黒カビが生えてきた。これにはさすがに驚いて、「このままでは人間以下だ。何かやり始めなきゃ」と。

では何をやるかと考えた時に、彼女が登山をやっていたことを思い出しました。小柄な女性でしたが、本格的な冬山を登っていた。私は、どうして彼女が山に行くのか、彼女が見ていた世界をこの目で見てみたいと思ったんです。

——それで登山の道に。
栗城 はい。本格的に登山を始めると、二〇〇二年に大学の山岳部に入部しました。まあ、部とはいつでも、部員は先輩と私の二人だけでしたが(笑)。

初めのうちは登山が嫌いだったんですが、その先輩が厳しい人で、いったん登り始めたなら登頂するまで下山が許されなかった。「登頂癖をつけろ」というのが先輩の口癖で、たとえ熱が三十八度あろうと、天気が悪かろうと、先輩はどんな先に行ってしまうんです。

冬山に一人取り残されるわけにはいかないので、とにかく喰らいついていきました。そうやって登っていくうちに、いつの間にか頂上に立っていたんです。

それまでの私は、何か夢を持つたとしても、そこにもう一人の自分がいて、「これは無理だろう」と、そうやって勝手に決めつけて、途中で諦めていました。
ところが、冬山では生きて帰るために必死になるしかなかった。私はそこで初めて、限界というのは、本当の限界に達する前に、自分で勝手に決めつけているのだという事に気づかされました。

——それから山の魅力に取り憑かれていったのですか。
栗城 そうですね。はじめは北海道の山ばかり登っていましたが、私の胸のうちに、大学生の間に海外の山を登りたいという思いが